翻訳

ポリュビオスの『歴史』の世界

竹島　俊之　訳

本稿はテーマとして挙げる項目に従って該当箇所の原典からの翻訳を提示することによってそのテーマを説明するという形式をとる。

(1) ポリュビオスについて

ポリュビオスはローマがカルタゴとの確執を通じてついにカルタゴを破り、世界制覇への道に踏み出し、ついにそれを成し遂げる過程および共和制時代の若い溌剌とした、興隆期のローマ、またその時代のマケドニア、ギリシャ、小アジア、エジプトの政治的状況をローマの世界制覇と関連させながら記述した歴史家である。

彼の『歴史』は四〇巻から成っているが、そのうち最初の五巻がわずかな欠損部を除き完全な形で残されている。一巻〜一六巻と一八巻の膨大な抜粋が Urbino の写本で残されており、残りはコンスタンティノス・ポルピュロゲネトスの抜粋で残されている。一七巻、一九巻、三七巻と四〇巻はまったく残されていない。

(2) テーマの選択

ポリュビオスがローマを歴史記述のテーマとして選んだ理由を説明するために一巻の一章と二章を引用しておこう。

一もしわれわれ以前の歴史家によって歴史それ自体の称賛が触れられずに置かれていたとしたら、このような作品を熱心に研究するように皆を励ますことがおそらくぜひとも必要であったろう。なぜなら過去の出来事ほど人間にとって正しい道を指し示すのに適しているものはないからである。2このことをほんのわずかの歴史家がさりげなく述べているのではなく、いわばすべての歴史家が次のように主張して作品を始めまた終えているのである。すなわち歴史から学ぶことは公的活動にとっての最も確かな学校であり、訓練なのである。他の人の運命がとった突然の転回を思い出すことは、運命の栄枯盛衰をいかにして威厳をもって担うことができるかを教えてくれる最も印象深くかつ唯一の教師なのである。3したがってすでに多くの人によって適切にとり扱われたテーマに

ついて同じ事を述べることは誰にとってもふさわしくないであろうことは明らかである、少なくともわれわれにとっては。4というのもわれわれが記述しようと意図している出来事の特異さはそれだけで老いも若きもすべての人をわれわれの作品の研究へと駆り立てるに十分な魅力を備えたものである。5すなわちどのようにしてまたどんな種類の国制によってほとんど全世界が五三年も経たないうちにローマの唯一支配下に入ったか、これは歴史上唯一の出来事なのだがそれを知ろうと思わないほどそれほどに人間のうち誰が愚かでかつ軽薄だろうか。6あるいは美的観察あるいは学問的知識の別の対象にたいしてこれから述べることを聞くよりももっとそちらの方が重要であるというほどの情熱を誰が持つであろうか。二われわれがテーマに選んだ出来事は途方もないものであり、大きなものであることは歴史家が取り扱った以前の帝国のうち最も有名なものをローマの卓越さと比較し、対比してみるとおそらく最も明瞭になるだろう。2次のようなものがその比較に値するものである。

ペルシャはある時代に大きな支配権と力を獲得した。しかしアジアの境界を踏み出そうとするたびごとに、自分の支配権を失っただけでなく、自分自身をも危険に曝したのである。3ラケダイモーン人は長い間ギリシャの覇権を目指した。しかしそれを得たとき、この地位を明確に主張できたのは十二年ばかりにすぎない。

4マケドニアはヨーロッパでアドリア海からイストロス川まで支配したが、それはこの大陸のわずかな部分に過ぎないように思われる。5次にペルシャ帝国を滅ぼした後、アジア全体にたいする支配権を獲得した。地理的かつ政治的に広範囲にわたる支配権を獲得したにもかかわらず、彼らの支配領域以外の人の住む地上の大部分は残したままだった。6なぜならシケリア、サルディニア、リビアは一度も獲得しようとすらしなかったからである。ヨーロッパについては、率直に言うと、西の最も好戦的な民族を彼らは知っていなかった。7しかしながらローマ軍は個々の部分ではなくて全世界を自分に従わせたのである。それとともに支配権を以前の支配権がそれと比較できないほどに、また後世のそれがそれを陵駕できないであろうほどに高めたのである。このことは当該の文書によってよりいっそう明瞭に理解されるであろうし、出来事を報告する実際的な歴史記述が学問好きな人々にもたらすことができる多様な有用性を認識するだろう。

(3) 歴史記述の出発点

三この歴史はオリンピアード一四〇年（BC二二〇～一一

六）からはじまることになろう、即ちギリシャではペルセウスの父でありデメトリオスの息子であるフィリップがアカイアと組んでアエトリアに対して最初の同盟戦争を行った年であり、アジアではコイレーシリアをめぐってアンティオコスとプトレマイオス・フィロパトールが互いに戦争をしかけた年であり、2イタリアとリビアでは、大抵の人がハンニバル戦争と名づけるローマとカルタゴ間の戦争が最初に起こった年である。これらの出来事はシキュオンのアラトが最後に叙述した出来事とつながっているものである。

3この前の時代にあっては、世界の出来事はいわばばらばらであった。それらの計画性、結果またその地域もそれぞれ異なり、関連性がなかったからである。4しかし、この時点からは歴史はまるで一つの身体のようになり、イタリアとリビアの事件はアジアとギリシャの事件と絡み合い、すべてはただ一つの目標に向かう。5それゆえにこの時点をわれわれの歴史の出発点として選んだのである。6なぜなら前記の戦争でローマがカルタゴを制圧し、世界制覇の道への決定的な一歩を踏み出したと思われた後すぐに他の地域へも手を伸ばし、軍隊を率いてギリシャとアジアへと渡海するという挙にあえてでたのである。

7もし、世界制覇をめぐって争ったこの二つの国家のことをわれわれギリシャ人が知っていたならば、これ以前のことに溯り、どのような意図であるいはどんな力に基づいて彼らがこのような挙に出たかを必要はなかったであろう。8しかし大抵のギリシャ人にはローマとカルタゴの以前の力も彼らの行った事柄も知られていないので、この歴史の記述のためにこの巻およびそれに続く巻を先行させることを必要だと考えたのである、9これらの事件の叙述に関心を向けた読者がローマ軍がどんな意図で、どんな力あるいはどれほどの資金で地中海領域を制覇する挙に出たのかと当惑しないように、10そして、これらの導入の巻で読者は彼らが当然の動機をもって世界制覇という挙に出てそれを成し遂げたことを知るであろう。

(4) ポリュビオスの歴史観

四この歴史記述の独自性とこの時代の驚くべきこととは次のことである即ち運命がさながら世界のすべての事件をただ一つの方向に導き、すべてが一つの同じ目標へと傾くことを余儀なくさせたかのごとくに、読者にこの歴史を通してすべての事件の完成を達成させた運命の取り扱いを一つの概観の下に導かねばならない。2というのもこの歴史を記述するという計画へとわれわれを駆り立て、けしかけたものは主とし

てこのことであったからであり、また同時代の誰一人として歴史総覧に思いを向けていないことである。さもなければ私は人と張り合ってまでこの課題に取り組むことはなかったであろう。3幾人かの歴史家は個々の戦争およびそれと関連のある出来事は研究しているが、われわれが知る限り誰一人として、出来事の経過を全体としてまたいつそしてどの時点からこの相互に密接に連関し合うことが始まったのかまたどのようにしてその完成をみたのかというその統一体において研究しようという考えをいだいていない。4運命の最も美しいそして同時に最も祝福に満ちた支配を沈黙して経過させず、無視しないことが無条件に必要だと私は考えたのである。5というのも運命は常に新しいことを開始し、絶えず人間の生活の間にまじって戦うのであるが、このような仕事をそもそも一度も完成させたことはなく、われわれの時代におけるほど壮大にその力をあからさまに見せたことはなかった。6このことは歴史の個々の叙述からは認識され得ない、もし誰かが最も有名な都市を一つ一つ訪ね歩きあるいは絵でそれを見てすべての人の住んでいる大地の姿、それらの各部分の状況と配置を理解したと思うならば別だが、そんなことは考えられ得ない。7歴史の個々の叙述から全体を正しい方法で認識できると確信している人々には、誰かがかっては生き生きとしていたそして美しかった身体のばらばらに投げ散らかされた部分を見て生きている存在物の力と美しさの実際の観照を得たと、考える場合と似たようなことが起こるように私には思われる。8というのも部分を組み立てそして姿と生きている美しさに基づいて全体を完全に復元し、それを同じ人物に見せるやいなやすぐに以前のかれらは現実よりはるかに劣っていた、夢見る人に似ていたと白状するだろう。9というのも全体の表象は部分から得られるが、それから知識および明晰な洞察をえることは不可能だからである。10同様に個々の歴史は全体についての信頼できる知識にはあまり寄与しないのである。11全体を互いに組み合わせ、対比させ、さらには同一性および違いから見つけ出して来て歴史から有用性と楽しみをえることに到達するであろうし、またそれができるであろう。

(5) 一巻の内容

彼はオリュンピアード一二九年（BC二六四～二六一）のローマ軍がイタリアから最初に海を渡った出来事を取り上げる。各出来事は二巻の一章1～3で次のように要約されている。

一前の巻でわれわれが明らかにしたことはイタリアを征服

した後、いつローマ軍がイタリア以外の事柄に介入し始めたか、これに次いでいかにして彼らはシケリアに渡り、そしてどのような理由で彼らはこの島をめぐってカルタゴ人にたいして、戦争を企てたのか、2次に彼らはいつ最初に海軍を造り始めたのか、そしてこの戦争での双方のこの戦争での終わりまでの運命、カルタゴ人によるシケリア全体からの撤退およびヒエローンに支配されている部分を例外としてローマ軍によるこの島の入手である。3これに続けていかにして傭兵軍がカルタゴにたいして反乱を起こし、そしていわゆるリビア戦争を燃え上がらせたのか、この戦争で行われた極悪非道さの度合い、この前代未聞の出来事のこの戦争の結末までの経過、そしてカルタゴ人の勝利を述べることをわれわれは企てた。これからはこれに続く出来事を語ろうと思う。4この場合、再三述べたように、外観だけを与え、最も重要なことだけを際立たせるつもりである。

これが一巻の記述の要約であり、二巻は三巻の一章7、8で次のように要約されている。

7われわれは序文とこの歴史全体の予備的考察を詳しく語ってきたのだが、その中でローマ軍が全イタリアを制圧した後、いつどのようにして、そしてなぜイタリア以外の関係に干渉し、カルタゴ人とはじめて海の支配を争ったかを明らかにしてきた。8またその中で同時にギリシャとマケドニアならびにカルタゴにおけるハンニバル戦争を、アジアの王がコイレーシリアをめぐって戦争を始めそうになっている時点にたどり着いたのである。

そして三巻はハンニバルとローマの戦いが記述される。その中から「ローヌ川の象の渡河」と「カンネーの会戦」を紹介しておこう。

(6) ローヌ川の象の渡河

三巻では、二次文献、三次文献を通して多くの人が知っていると思われるハンニバルが象を連れ、アルプスを越えてイタリアへ侵入する途中でのローヌ川で象を渡す場面が描かれている。

四五5ハンニバルは集会の翌日、夜明けとともに、全騎兵隊を海の方角に向けて前面に押し出し、隊列を組んで待ち伏せさせ、歩兵を陣営から出発させた。6自分は象および象と共に残っている者たちを引き受けた。象の渡河は次のように

して行われた。

四六互いにぴったり合うたくさんの筏を作り、これらの二隻づつを太い綱で縛り、幅が合わせて五十フィートあるそれを河の船着き場に固定した。2これらの外側にもう一つの筏が縛りつけられ、その結果いわば橋を架ける建築が河の中へ延長されていった。3流れに対する側面は全建築物が一つにまとまり、流れに押し流されないように、岸に立っている木々に巻き付けられた綱によって安全にされた。

4橋全体の長さを二百フィートにした後、最後の筏に最大のそして互いにしっかりと縛りつけられた筏を結びつけた。そしてその筏は他の筏とは結び目が容易に解けるようにしてあった。5それらにたくさんの引き綱を結びつけ、それを船が、河に対して押し流されるのを許さず、流れに耐え、その上に動物を乗せて運搬し、渡らせようとした。6その後、大量の土を筏に運び、陸地から渡し場へ通じる道と等しく、平らで、同じ色になるまで盛り上げた。7さてこの動物は水の所まではインド人に従うことに慣れていたが、水の中へ入ることは絶対にあえてしようとはしなかったので、この盛り土の上を先に雌象を歩かせた。雌には従順だったからである。8最後の筏の上に来ると、他の筏と固定されていた綱を断ち切り、直ぐに舟がその綱を引っ張り、その動物とその下にある筏を盛り土から引き離した。9そうなるとその生き物は最初は不安に陥り、あちらこちらと向きを変え、四方に逃げ道を探した、しかし、いたるところが流れに取り巻かれているのを見て、恐れ、じっとしていることを余儀なくされた。10このような方法で常に二つの筏をしっかりと結び付けることにより、大部分の動物がこちら側へ渡された。11若干が渡る最中に恐怖のために河の中へ飛び込んだ。それを操っていたすべてのインド人は死に、象は助けられた。12すなわち、象は鼻の力と大きさを利用して、それを水の上に差し出し、呼吸をし同時に飲み込んだすべての水を吹き出して持ちこたえた。大部分の距離を立って歩まねばならなかったが。

四七その動物が河を渡ると、ハンニバルは象および彼が後衛を形成した騎兵隊を率いて海から上流へ、東の方向に、ヨーロッパの内陸へ行軍を続けた。2ローヌ川は西に向けられた水源をアドリア海の入り江の上のアルプスの北斜面に持ち、南西に流れ、サルディニア海に注ぐ。3広範囲に亙って峡谷の間を流れ、その北側にケルト人のアルドゥア人が住んでいる。その南側全体はアルプスの北斜面によって境界づけられている。4すでに詳細に述べたポー川周辺の平原をローヌの谷からこの山の尾根が切り離している。それはマルセイユから始まり全アドリア海の最奥部まで延びている。5ハンニバ

ルは当時この山を越えてローヌの谷からイタリアへ侵入したのである。

(7) カンネーの会戦

三巻で続けて述べられるこの会戦はその後のイタリアとカルタゴの抗争の重要な転回点である。

百七冬と春の季節の間は互いに向き合って陣に留まっていた。しかし季節が新しい年の収穫物からの糧秣支給を許す頃になった時、ハンニバルはゲルニウムから軍隊を出発させた。2どんなことがあっても敵を会戦へと強いることが自分にとって有利であると判断して、カンネーと呼ばれる都市の城砦を占拠する。3そこにローマ軍のための穀類やその他の必需品がカヌシウム周辺の地域から集められ、そこから常に必要に応じて軍隊へ運ばれていたからである。4その都市自体はすでに以前に破壊されていたのだが、敵が今や備蓄品もろとも城砦を我が物にすると、かなりの混乱がローマ軍に生じた。5つまりその場所が占拠されたために糧食のためにのみ困難に陥ったのではなく、そこが周辺の地域に対する好都合な位置のためであった。6その地方が荒され、すべての同盟軍の気分が不安定なので、もし敵に接近すれば、戦いを避けることはできない、として、絶えずローマに使者を送って、何をしなければならないかを問い合わせていた。7彼らは会戦をし、敵とぶつかることを協議した。グナエウスとその同僚にはまだ待つように指令し、執政官を派遣した。8皆の視線はアエミリウスに向けられ、彼にまず第一に最大の希望が託されていた。彼のこれまでの人生で証明された有能さと、とくに数年前のイリュリア人に対する戦争での勇敢でかつ成功した指揮のためであった。9この度は八軍団で戦うことを決議した。このことはローマでは以前には一度もなかったことである。各軍団は同盟軍を除外して五千人の兵力を擁していた。10つまり、以前に述べたようにローマ軍は常に四軍団を用意し、各軍団は四千人の歩兵と二百人の騎兵を擁していた。11決定的な戦いが差し迫った場合には各軍団の兵力を歩兵は五千人に騎兵は三百人に増強する。12同盟軍の歩兵の数は全体として三倍にする。13この同盟軍の半分と二軍団を執政官のそれぞれに与えて戦場に送り出す。14大多数の戦いは一人の執政官と二軍団および同盟軍の先に挙げた数で戦い抜き、一時期に、一つの戦争に対してすべてを用いることは滅多にない。15その時は、四軍団だけではなく、同時に八軍団で戦おうと決心したほど驚き、おそれたのである。

百八それゆえに、アエミリウスとその同僚を励まし、戦い

から生ずる結果の大きさをはっきり示し、その瞬間が来たら雄々しく、祖国に相応しく戦い抜くように命じて送り出した。2両執政官は軍隊に到着すると、軍隊を集め、元老院の決定を多くの者に伝達し、その状況にふさわしい励ましの言葉を与えた。そのさい、ルキウスは自分の経験から語った。3彼の言葉は大部分、最近蒙った敗北に関わるものだった。すなわち、これが気後れの原因であり、多くの者がこの点で励ましの言葉を必要としていた。4それゆえに、あの戦いがあのような結末を迎えた原因は一つ、二つではなくもっと多く見つけ出すことができる、5今の時点ではもし勇敢であれば、敵に勝利しない理由はないことを明らかにしようとした。6すなわち、当時は両執政官は一緒になって自分の軍隊で戦ったのではないし、また訓練された部隊ではなく、まだ危険を直視していない、新たに徴募された兵士の部隊だったのだ。7主要な点は、敵をほとんど見ずに配列し、全体を決する戦いへ入ったほど、前回は敵のことについて無知であったということだ。8つまりトレビアで敗れた者たちは、前日シケリアから到着し、次の日夜明けと同時に戦いに入らねばならなかったのだ。9エトルリアで戦った者たちは以前にも戦いの中においてすら、不運な霧のために敵を目にしていない。10今はこれらすべての点で逆である。

百九すなわち、第一にわれわれ二人が来ているのだ。諸君と危険を共有するためだけでなく、われわれは前年の執政官も残して、同じ戦いに加わるために用意しておいたのだ。2諸君は敵の武装、戦闘隊形、戦力を知っているだけでなく、すでに二年間毎日戦い続けているのだ。3以前の戦いと比較すると、一つ一つの条件がすべて逆になっているので、これからの戦いの結末も逆になるのは当然なのだ。4われわれが同じ兵力で敵とぶつかった場合に、小さな戦いでは大抵勝利していて、皆を同時に配列して、敵よりも戦力が二倍以上であるときに敗れるなんてことは馬鹿げているし、むしろ言わば不可能なのだ。5だから、諸君、勝利するための条件はすべて満たされているのだ。ただ一つ欠けているもの、それは諸君の意志と熱意だ、それについてこれ以上励ますことは諸君にふさわしくないと考える。6ある所で給料のために従軍する者、同盟の義務で隣国のために戦う者、このような者には戦いの瞬間にのみ最大の危険が迫るが、その結果はわれわれと彼らとではいくぶん異なっている。このような者には励ましの形式が必要である。7しかし今の諸君のように、戦いが他人のためでなく、諸君自身のため、祖国のため、妻と子供のために行われ、その結果が戦いそれ自体より数倍も重要である場合には、注意を喚起するだけで励ましは必要ではな

い。8戦いにおいて勝利することを、またこれができなければ、生きて自分が愛するものが凌辱され、破滅するのをみるよりも、自ら死ぬことを誰が望まないだろうか。9それゆえに、諸君、私によって言われる言葉がなくとも、敗れることと勝つことからの相違とその結果を眼前に思い描き、祖国のためにこの軍団だけでなく、すべてが危険に曝されているのだと考えて戦いに行くように。10すなわち、もし目前の事態が異なった決着をみたら、敵を陵駕するために今目の前にあるものに付け加えるものは何もないのである。11すなわち、祖国のすべての熱意と力は諸君に預けられ、救いのすべての希望は諸君の中にあるのだ。12諸君は祖国を欺いてはならない、祖国に感謝の意を表しなさい、すべての人々に、この前の敗北はローマ軍がカルタゴ人よりも勇敢でなかったことにその原因があったのではなく、当時戦った兵士たちの無経験と不利な状況にあったのだということを認識させなさい。13このようなこと、またこれに類するような励ましの言葉を与えた後、ルキウスは彼らを去らせた。

百十次の日出発すると、敵が野営していると聞いている所へ軍隊を率いていった。二日間の行軍の後、敵から五十スタディオン離れて陣を張った。2アエミリウスは周辺が平地で樹木が生えていないのを見たとき、敵は騎兵が優勢なのでぶつかるべきではなく、さらに先へと行軍し、戦いが主として歩兵によって行われる場所へ進むべきだと主張した。3テレンティウスが無経験のために逆の意見を支持したとき、執政官の間での争いと、指揮の不安定さ、すなわち起こるとしたしたら、最も破滅的なことが生じた。4次の日の総指令はテレンティウスに帰属したので―ローマ軍の習慣で執政官は一日毎に指揮権を交替した―アエミリウスは何度も懇願し、阻止しようとしたのだが、彼は敵に近づくために陣を上げて前進して行った。5ハンニバルは軽装兵と騎兵を率いて立ち向かい、まだ行進中のところを不意に襲いかかって、合戦となり、彼らの間に大混乱を引き起こした。6ローマ軍は重装兵の一部を先に進軍させることによって最初の攻撃を受け止めた。その後槍兵と騎兵を投入して全体としての合戦では優位に立った。なぜならカルタゴ軍には言うに足るほどの背面援護がなく、ローマ軍ではいくらかの歩兵中隊が軽装兵に混じりあって同じ所で戦ったからである。7その時、夜がおとずれ互いに退却した。カルタゴ軍にとっては、その攻撃は希望通りにはいかなかった。8翌日アエミリウスは戦わないことを決めていたのだが、安全に兵を引き揚げることができず、軍団の三分の二でアウフィドゥス川の辺で陣を張った。この川だけがアペニン山脈を突き抜けている。9これは連続した

山で、イタリアのすべての川の分水嶺を形成し、一方はティリア海に他方はアドリア海に流れる。アウフィドゥス川はこの山脈を通って流れ、その水源はイタリアのティリア海に向いた傾斜地にあるが、アドリア海に注いでいる。10軍団の三分の一は向こう側、東の方の渡河地点で陣を張った。そこは敵の陣営からいくぶん遠い所に位置している自分の主要陣営から約十スタディオン離れていて、11川を渡って出かけていく主要陣営からの飼料徴発部隊を援護し、敵の陣営を威嚇することを意図したものである。

百十一 ハンニバルはその頃、状況が戦いへと、敵とぶつかることを促しているのを見て取り、しかし先の敗戦で多くの者が臆しているのを配慮し、励ますことが必要だと判断して兵士を召集した。2彼らが集まると、皆に周りの国を見渡すように命じ、この状況の中でもし力が与えられたとしたら、この場所で騎兵隊が敵よりはるかに優勢であり、全体についての雌雄をけっすることができることより何を神に祈るかと尋ねた。3皆がこの言葉に賛成であることを見て取ると「まず神々に感謝しなさい。すなわち、神々がわれわれに勝利を得させようと力を貸して敵をこの場所に導いてきているのだから。4次にわれわれに感謝しなさい。なぜならわれわれが敵が戦うように強いたのだから。すなわち、彼らはもはやこれを避けることはできないのだ。しかも明らかにわれわれに有利な地点で戦うことを。5諸君を戦いに対して勇敢であれ、一生懸命頑張れと励ますことは決してふさわしいようには思えない。6すなわち、諸君が無経験であるときには、そうしなければならないし、諸君に対して手本を示しつつ長々と言を弄したであろう。7しかし連続して三度明らかにローマ軍にたいして勝利しているときに、どんな言葉が事実よりも大きな勇気を諸君に注ぎ込むだろうか。8これまでの戦いで諸君は土地とそこから提供される良き物をわれわれの約束通り手に入れた。われわれは諸君にたいしていった言葉において嘘をついていない。今度の戦いは諸都市とそこに収蔵されている富をめぐってのものなのだ。9それを手にいれたならば、直ちに諸君は全イタリアの主人になるだろう。今の苦労から解放され、ローマ軍のすべての幸福を諸君が所有することになり、この戦いによって万人の支配者となり主人となるだろう。10それゆえに、必要なのは言葉ではなく、行為だ。つまり、神々はそれを望んでいるのだから、諸君にたいして今にもその約束を実現するだろう、と確信している」

11このようなことをそしてそれに類したことを述べ、軍勢が熱狂して拍手喝采すると、彼らの戦闘意欲を称賛し、受け入れて立ち去らせた。それからただちに陣を張った、しかも

敵の主要な陣がある同じ側で。

百十二次の日、ハンニバルは皆に準備をし、身体の手入れに留意するように命じた。翌日川に沿って軍隊の戦列を整えた。できる限り早く敵と戦おうとしていることは明らかだった。2しかしその地形が気に入らず、またカルタゴ軍が糧食を手にいれるために直ぐに陣を移動せざるをえないのを知って、両軍団を見張りの強化によって安全を計りながら、動かなかった。3ハンニバルは十分な時間待っていたが誰も出撃してこなかったので、他の軍勢は野営地に戻し、ヌミディア人を小さい方の陣営から水を汲みに行った者に向って送り出した。4ヌミディア人は防柵まで来て、水汲みを妨害すると、このことはテレンティウスを戦いへと刺激し、同様に部隊も戦闘意欲で燃え上がり、ぐずぐずしていることに対する不満が充満した。5すべての人間にとって待つという時間を耐えることは最も難しいことなのである。一度決定が下されると、悲惨のどん底とみなされる事柄を辛抱強く何とかたえねばならないのである。6互いに対峙して陣を張り、毎日前哨の小競り合いが行われているという報せがローマに届くと、興奮と不安が町を支配した。7すでに度々先の戦いで敗れているので、多くの人々が将来を恐れ、完全な敗北がもたらさざるをえないことを観念的に予見し、予想した。8彼らの間にあったすべての予言が今や噂の種になった。すべての神殿、すべての家が前兆とで一杯になり、それゆえに町全体が誓願、犠牲、祈り、嘆願で満たされた。9すなわち、危急の時にはローマ軍は神々と人間を鎮めるのに非常に熱心になり、このような状況の時には何事もふさわしくないとはみなさず、この目的を達成するのに適していると思われるものをすべてとりあげたのである。

百十三テレンティウスが次の日総指揮権を引き受けると、日の出と同時にそれぞれの陣営からの部隊を渡河させ、直ぐに戦闘隊形に配置した。2次にもう一つの陣営からの部隊を同じ線上で配置し、前線を南に取った。3ローマ軍の騎兵を川辺の右翼に配し、これに続けて歩兵をただ一つの直線で並べた。そのさい、歩兵中隊を以前よりも密集させ、前線の歩兵中隊は深さを数倍にした。4同盟軍の騎兵は左翼に配置した。さらに全軍の前に距離を置いて軽装兵を配置した。5同盟軍と合わせると、歩兵は約八万人、騎兵は六千人より少し多かった。

6同じ時にハンニバルは石投げ器を使う兵士と槍兵を渡河させ、彼らを軍隊の前に配置した。残りの軍勢を陣営から出動させ、二ヶ所で川を渡らせ敵にたいして配列させた。7川辺の左翼は、ローマ軍の騎兵に対してイベリア人とケルト人

を配置し、これに重装兵のリビア人の半分が連なり、これにさらにイベリア人とケルト人の重装兵がつらなり、これにリビア人の残りの半分が続いた。次に右翼にヌミディア人の騎兵を配置した。8これらすべてを真っ直ぐな前線で一列に並べた後、イベリア人とケルト人の真ん中の部隊を先に進ませ、残りの部隊はこれと繋がっているが徐々に離れさせ、その結果、三日月の形態が形成され、側面部隊の線は長く伸ばされるままに薄くなった。9その意図はリビア人を予備軍として用い、イベリア人とケルト人で行動を開始することにあった。

百十四リビア人の武装はローマ式だった。ハンニバルは彼らを皆、前の戦いからの戦利品から選び出して飾ったのだった。2イベリア人とケルト人の大形の盾は同じ形であり、剣は反対の性質を持っていた。3つまり、イベリア人の剣は刺すことも打撃も傷つけるのに効果てきだったが、ガリア人の剣は振り下ろすことからの用途のみを持っていた。しかも距離をおいてからのそれを。4彼らが交互に配置されると、ケルト人は裸で、イベリア人は先祖からの風習に従って亜麻の赤紫で縁取りした衣服で着飾っていたので奇異で、目立つ光景を呈した。5カルタゴ人の騎兵の数は全部合わせると一万人であり、歩兵の数はケルト人を入れて四万人弱だった。ローマ軍の右翼はアエミリウスが、6左翼はテレンティウスが、中央は前年の執政官であるマルクス・アティリウスとグナエウス・セルヴィリウスが受け持った。7カルタゴ軍の左翼はハスドゥルバルが右翼はハンノが受け持った。中央には兄弟のマゴンと共にハンニバル自身がいた。8ローマ軍の配置はすでに述べたように前線を南にし、カルタゴ軍は北にしていたので、太陽が昇ってくることは両軍にとって不利ではなかった。

百十五戦いが前衛に立つ者によって開始されたとき、軽装兵の戦いは最初は均衡を保っていた。2しかしイベリア人とケルト人の騎兵がローマ軍に近づくや否や彼らは真剣な、野蛮人的な戦いを繰り広げた。3すなわち、戦いは規則通りに退却と転換で行われたのではなく、一度ぶつかり合うと、馬から降りて人対人とで接近戦で戦ったのである。4そのさい、ローマ軍は全員意気軒昂とかつ勇敢に戦い抜いたのだが、カルタゴ軍が優位にたち、白兵戦で多くを殺し、他の者たちを情け容赦なく殺害し、虐殺しながら川に沿って追い立てて行った。その後、軽装兵の後を引き継いだ歩兵部隊が互いにぶつかり合った。5イベリア人とケルト人の戦列は短時間もちこたえてローマ軍にたいして勇敢に戦った。その後多数に圧迫され、傾き、後ろへ後退し、その結果三日月形の反りが消滅した。6彼らを激しく追ったローマ軍の歩兵中隊は敵の戦

列を簡単に突破した。ケルト人は薄い戦列を敷いていたからである。彼ら自身は両翼から中央部へ、戦いの場へと群がった。7すなわち、両翼と中央部が同時にぶつかったのではなく、まず中央部がぶつかったのである。なぜなら三日月形に配置されていたケルト人は翼よりはるか先に進み、三日月の反り面は敵に向けられていたからである。8ローマ軍はケルト人を追い、敵が退却した中央部へ走り集まり、そしてはるか前方へ入り込み、その結果、重装兵のリビア人が側面の両側で彼らにたいして立つということになった。9そのうちの右翼に立っていたものは盾の側（左）に方向転換し、槍の側（右）から攻撃しながら側面の敵に向って進んで行った。10左翼に立っていたものは槍の側に方向転換し、盾の側から戦列へ進んで行った。この場合状況が何をしなければならないかを自ずと教えたのである。11このことから、ローマ軍はハンニバルが意図したように、ケルト人にたいして前へ押し進んで行ったためにリビア人によって真ん中で取り囲まれるということになった。12彼らは今や戦闘隊形を敷いてではなく、人対人、歩兵中隊たい歩兵中隊で側面から押し寄せてくる敵に向いながら戦ったのである。

百十六アエミリウスは最初から右翼に立ってしばらく騎兵戦に加わっていたが、今まで無傷なままだった。2今や自分の励ましの言葉に忠実に、仕事それ自体の場に居合わせることを望み、またその日の決着は主として歩兵部隊にかかっていることを見たので、3全戦闘隊形の中央へ馬を駆って行き、同時に自らを白兵戦に投じて、接近戦で戦った。同時に兵士たちを励まし、戦いへと駆り立てた。4同じ事をハンニバルも行っていた。すなわち、彼は最初から軍隊のこの部隊にいたからである。

5右翼から左翼に配列されていたローマ軍の騎兵に襲いかかったヌミディア人は戦いの特異性のために何か重要なことを達成はしなかったが、自身損失することもなかった。しかし敵をよそへ向けさせ、また四方八方から攻撃することによって、敵の働きを封じた。6しかしハスドゥルバルと彼の騎兵隊はローマ軍の騎兵隊を川辺で全く少数を例外として殺した後、左翼からヌミディア軍の騎兵隊の援助に駆けつけると、ローマの同盟軍の騎兵隊は彼らが大勢で押し寄せて来るのを見て、退却して行った。7この瞬間ハスドゥルバルは実践的なかつ分別ある仕事をしたように思われる。つまりヌミディアの騎兵隊は一度退却し始めた者に対しては最も効果的であり、また彼らにとっては最も恐ろしい存在であるのを見て、退却する者は彼らに任せ、リビア軍を援護するために歩兵の戦いが行われている所へと騎兵隊を率いて行った。8ローマ

軍の軍団に背後から襲いかかり、同時に多くの個所で次々に突進を行い、リビア軍の自身を強め、ローマ軍を精神的に打ちのめし、驚愕させた。9この時、レキウス・アエミリウスは白兵戦で重傷を負った後、命を失った。他のそうした人がいるにしても、彼の他の人生においてもそうであったように、最後の時においても祖国に対して忠実に義務を果たした人だった。10ローマ軍は周りを取り囲んでいる者に対して前線を形成して戦っている時までは持ちこたえたが、11周りから前列に立つ者が次々に倒れて行き、ついに狭い空間に押し込められたとき、皆立っていた場所で倒された。その中にはマルクスとグナエウスもいた。彼らは前年の執政官であり、立派な人たちで、戦いにおいてローマにふさわしい者となった。12彼らの取っ組み合いと殺戮の間に、ヌミディア人は逃げる騎兵を追跡し、大部分を殺し、ある者は馬から投げ落とした。13少数の者がヴェヌシアへ逃げた。その中にガイウス・テレンティウスがいた。彼はローマ人の執政官であり、職務を国家の破滅のために行い、今恥ずべきにも逃げたのである。

百十七これがローマ人とカルタゴ人の間のカンネでの会戦の結末だった。勝者も敗者も勇敢な男としてその真価を発揮した会戦であった。2事実それ自体がそのことを証明した。六千人の騎兵のうち六十人がガイウスとヴェヌシアへ逃亡した。同盟軍の騎兵のうち約三百人がばらばらになって他の都市に逃れた。3戦いに参加していた歩兵のうち一万人が捕らえられた—彼らは戦闘の外にいたのである—戦闘それ自体からは約三千人だけが周辺の都市に逃れた。4残りのすべては勇敢な戦いの後戦死した。その数は七万人だった。カルタゴ軍の勝利に最も貢献したのは以前と同様に騎兵の数の多さであった。5そのことによって、完全に同じ兵力をもって敵に相対するよりも歩兵隊は半分でも騎兵隊が完全に優位である方が戦争で決着をつけるのには有利であることが後世の人に示された。6ハンニバル側では約四千人のケルト人と約千五百人のイベリア人、リビア人がそれに約二百人の騎兵が倒れた。7生捕りにされたローマ人は会戦に加わっていなかった。しかも次のような理由からだった。8ルキウスは自分の陣地に一万人の歩兵を残した。もしハンニバルが自分の陣地のことは構わずに全軍を戦場で用いたならば、戦いの間にそこに入り込み、敵の荷物を分捕ることができる、9他方ハンニバルがこの危険を察知して強力な守備隊を残していれば、ローマ軍に対する戦力は数で減ずるだろうと考えたためである。10彼らは次のようにして捕らえられた。ハンニバルは十分な数の守備隊を陣地に残しておいたので、戦いが始まるやいなやローマ軍は命令通りにカルタゴ軍の陣地に残っている者に

向って突進した。11最初は持ちこたえていたが、苦境に陥っていたときに、ハンニバルがすべての地点で決着をつけた後、味方を援助にやって来て、ローマ軍を撃退し、狭い陣地に閉じ込め、彼らのうち二千人を殺し、残りのすべてを生捕りにして手中におさめた。

12同様に周辺の城砦に逃げ込んだ者をヌミディア軍が降伏させて連れて来たのである。彼らは逃亡へと向っていた約二千人の騎兵だった。

百十八会戦のこの結末は両方の側で予期していたように、広範囲に及ぶ結果をもたらした。2カルタゴ軍はその勝利によってただちに残りの海岸地域をほとんどすべて制圧した。3タレンティン人はただちに彼らに降伏し、アルギュリパン人（アルピの住民）と、ある数のカプア人がハンニバルを呼び寄せ、残りのすべての者が視線をカルタゴ人に向けた。4彼らは最初の攻撃でローマそれ自体を奪うという大きな望みをいだいた。5それにたいしてローマ人は敗北の結果、ただちにイタリア人に対する支配を失い、自分自身および都市の存続をめぐる大きな不安と危険の中で漂った。ハンニバルが都市を徹底的に破壊するためにいつ来るかも知れないと思ったからである。6というのも、運命が敵と結託して、不幸の度合いをより完全にしようとしているかのように、それから数日後、最初の驚愕がまだ都市をしっかり捉えている間に、ガリアへ派遣した執政官が思いもよらず待ち伏せに遭い、軍隊もろともケルト人によって完全に滅ぼされたという報せが入ったからである。7しかし元老院は可能であるかぎりのものは何一つ見捨てなかった。国民を励まし、都市の安全のための必要な処置を講じ、男らしい決意で現況について協議した。8ローマ人はその時、明白な敗北を喫し、武器による栄誉からは身を引いたにもかかわらず、9国制の独自性と用意周到な対抗措置で、次にカルタゴ人に勝利することによって、イタリアにおける支配権を取り戻しただけでなく、短期間で人の住む全世界の支配者となったのである。10それゆえにオリュンピアード一四〇年がイベリアとイタリアにおける出来事に関して包含している事柄を報告した後でこの巻を終えることにする。

ここで一度ハンニバルとローマ軍の戦いの記述は中断される。四巻と五巻はギリシャ、マケドニア、小アジア、エジプトのこの時点までの政治的状況が述べられ、六巻はローマの国制と軍隊の組織について詳述される。そして七巻以降で、イタリア、シケリア、ギリシャ、アジア、エジプト、イベリア半島の平行した年の政治的状況が記述されていく。

資料

Polybivs Historiae, Bibliotheca Scriptorvm Graecorvm Romanorvm Tevbneriana.

翻訳

Drexler, Hans: *Polybios Geschichte,* Artemis Verlag, 1961.

Hampton: *The General History of Polybius,* in five books, 1756 London.

W.R.Paton: *Polybius The Histories.* Loeb Classical Library.